

MACC通信

マック
Monozukuri Arakawa City Cluster

第13号

2010年6月30日発行

荒川区が進める「MACCプロジェクト」は、荒川区独特の多彩な産業集積を活かし、区内企業の顔の見えるネットワークの形成を支援することで、荒川区の産業振興（商品開発や販路拡大など）を図ろうとするものです。「MACC通信」は、「MACCプロジェクト」に関わるホットな情報をお届けしていきます。

今回は、「第2回健康福祉ビジネス研究会」（5月12日開催）MACCセミナー「人材採用のコツ」（6月2日開催）についてのトピックスです。

第2回健康福祉ビジネス研究会を開催!!

「福祉ロボット機器開発の現状と今後」を学習



MACCプロジェクトの分科会である「健康福祉ビジネス研究会」（略称：健ビ研）の第2回会合が、5月12日に産業経済部研修室で開かれました。当日は、健康福祉機器を開発する際の主要技術といわれる「福祉ロボット」に焦点を当て、「福祉ロボット機器の現状と今後の研究」をテーマにした講演会のほか、研究者と区内企業の交流会が行われました。

講演会の様子

冒頭、MACCプロジェクトを推進する荒川区産業経済部の石原久・産業活性化担当部長（経営支援課長）があいさつし、「健ビ研は社会的にニーズの強い健康福祉分野のビジネス展開を集中的に進めるために、区内の意欲的な企業を結集して発足した。研究開発活動を本格化し、新製品開発の具体的な成果を期待したい。区も積極的に支援する」などと述べました。



石原久・産業活性化担当部長

【講演会 1】

「福祉ロボット機器開発の現状と今後の研究」

講師：藤本泰成氏（首都大学東京システムデザイン学部知能情報処理研究室特任研究員）

～介護予防を技術面からアプローチ～

私の専門分野は、情報工学に関する研究開発です。主に産業分野の診断や短期予測、生体情報の解析を行っています。数年前に、理学療法の先生との出会いがきっかけで、福祉ロボットに関心を持つようになり、ロボットシステムを利用した介護予防の研究開発に取り組んできました。本日は、研究活動の目的でもある『介護予防のための知能を持ったロボットの研究』についてお話しします。

高齢化社会が進行すると、介護を必要とする高齢者が急増すると予測されるため、要介護の状態になるこ

とをできるだけ防ぐ（予防）とともに、要介護状態にあってもそれ以上悪化しないように（維持・改善）することが求められています。その課題に対する技術的なアプローチが福祉ロボットの開発です。



藤本泰成氏

～見守りロボットで生活リズムを確保～

一般に、福祉ロボットのすべてが知能をもって動いているわけではありません。技術的には、まだまだ開発途上という現状の中で、私は介護予防として注目されている「見守りロボットシステムを利用した生活リズムの確保」と「日常支援のための車いすロボット」に関する研究を進めています。

「見守りロボット」というのは、人が寢床を離れる動きを捉える「離床検知」、日常的な人の動きを捉える「日常リズム誘導」、転倒する動きを捉える「転倒検知」などの機能を持ったロボットです。その中心的技術は人を認識し、動きを追う技術で、この分野の技術革新は日進月歩の感があります。各方面の研究開発を参考にしながら、例えば、ロボットの暗視能力を利用したシステムや、就寝中の動作検出、移動ステレオ視による地図生成、重みつきテンプレートマッチングによるベッド検出、日常行動のログ収集システムなどの実験を試み、データを蓄積してきました。朝の起床から夜の就寝までの1日のスケジュールをサポートする活性化支援の技術などについてもそれぞれ検証・分析しています。一般的に公表されている評価結果などと比較し、問題や課題を洗い出しておいて、実用化に向けた見守りロボットづくりに取り組んでいるところです。

【講演会 2】「福祉機器開発の実際」

講師：深谷直樹氏(東京都立産業技術高等専門学校医療福祉工学コース准教授)

～学生時代からロボットを研究～

私は学生時代にNHKの高専ロボコンに参加し、現在は指導教員として学生のロボコンづくりの指導に当たっています。その関係から「ある目的を達成するためのロボット(機械)はどのような機構や構造が良いか」という研究について、ある程度の蓄積をもっています。福祉ロボットとの接点は、球面超音波モーターという特殊なモーターの開発を行う中から、その応用例として球面超音波を用いた人工義手の開発に取り組んだことがきっかけです。以後、学生と一緒にになって福祉系の機械やロボットの“種”になるものをいくつか作成しましたので、ご紹介します。

～人工義手の技術を進化させる～

1つ目は、3自由度球面超音波モーターを応用した福祉機器です。もともと上下水道・ガスなどの配管ネットワークの維持管理用に使われている検査装置です。ヘッド部分に球面超音波モーターを使用し、カメラをどの方向にも135度向けることができるほかどの方向にも曲がるジョイント部分によってL字管も通行できるものです。この機能を生かして人工義手(腕)を作成し、実験を続けているほか、腕や足の動きをサポートする福祉ロボットを構成する有効な技術として利用

～知的電動車いすの有用性を示す～

「日常支援のための車いすロボット」では、人の姿勢情報を取り込んで、車いすを利用する人の日常的な動きを支援するモビリティロボットを目指しています。実験用の装置(ロボット)を試作して、理学療法士の知見に基づいた動きを再現し、機能実験を積み重ねてきました。行動の開始となる起立を支援するため、健常者の体重心の動きとパーキンソン病患者の動きを解析して、モビリティロボットに支援機能を取り入れる実験を行ったほか、歩行する場合の支援、車いすの操作を支援する方法を解析し、考察を加えてきました。その結果、人の体重心と身体各部位の動きから評価式を導き出して、起立・歩行・操作の3つの支援を行うモビリティロボットとして「日常支援型知的電動車いす」を開発し、その有用性を示すことができたと思っています。

～脈波を検知する福祉機器の開発へ～

車いすロボットでは、人の姿勢情報を用いて技術開発を進めてきましたが、今後は「心身情報を導入した福祉機器」の研究を進めていきたい。専門的には、カオス理論による加速度脈波を解析して、人の体調やストレス評価に基づいた支援を行う機器ということになります。血流や心拍を計測・解析して人の動きを支援する福祉機器の開発が次の取り組み課題と考えています。

範囲を広げつつあります。

2つ目は、足腰が弱くなった高齢者やリハビリを必要とする人を対象にした、転倒防止用歩行補助具の開発を進めています。使用する人の腰部にモーターを装着し、太ももから足先に歩行補助用具を添える形になりますが、実験段階では歩行を補助する機能には問題ないので、今後は自動化システムに工夫を凝らしたいと思います。



深谷直樹氏

～発想を変えた歩行支援ロボット～

3つ目は、転倒防止用歩行補助具として、リハビリ用の二又歩行杖の開発に取り組んでいます。これはモーターなどを使わず、利用者が自力で歩行回復を目指す補助具で、特に階段を昇り降りする歩行訓練には優れていると思っています。一般的に、杖は棒状とされていますが、その既成概念を打ち破っているのが、

この二又杖です。利用する人が何を苦手としているのかを分析し、その解決に役立つ技術だと考えています。区内企業の(有)板垣製作所が「自立する杖・フェレット」を開発して話題になっていますが、この杖のすばらしい点は、「杖は棒状」という既成概念を打ち破っていることです。私が研究している二又杖も新たな概念の杖です。

4つ目は、本格的な人工義手の分野です。モーター1個で「握る・持つ・つまむ・離す・引く・すくう」という6つの動作を行う人工義手について、それぞれの機能を高め、複合化する技術開発に力を入れています。腕の筋圧で動かす技術や、指の1本1本をバラバラに動かすフレキシブルハンドの技術、指を動かした後にはがっちり握り締める技術などの研究を深めています。そこからパンを運び、フォークを差し出すといった人間型食事介護ロボットや、1台で4つの変形(リクライニング・スタンディング・リクライニング・チルト)を実現したロボット車いすなどを試作し、検証しているところです。

5つ目は、2足歩行ロボットの研究も行っています。ゲタを履いて歩くゲタ歩行時の法則に基づく膝伸展歩行について、運動靴(ロボット)を製作して効率の良い歩行の実現を目指して実験を重ねています。

～「とりあえず作ってみよう」のチャレンジ～

そのほか、ローラースケートを付けたロボットなどの「簡易移動装置」とか、車いす型自転車、チェアスキーなど「車いすとスポーツ」についても関心を持って研究しています。

福祉機器は「必要か・必要でないか」は使う人が決めることなので、「とりあえず作ってみよう」の気持ちで臨んでいます。たった1人でも喜んでくれる人がいるなら挑戦します。福祉機器にはたくさんの選択肢があっていいと思います。

【支援機関あいさつ】

首都大学東京 産学連携センター
チーフコーディネーター 室山丈夫氏

～新たなパートナーシップを広げたい！～

首都大学東京と荒川区内企業の産学連携は、すでに健康・福祉分野の製品開発でいくつかの実績をあげています。今回さらに、技術開発の幅を広げ、ロボットを活用した新製品・新技術開発で成果を挙げたいと思います。

産学連携を進める際は、産学連携センターが橋渡し役となって、研究活動をしている先生方と事業化を目指す企業側との出会いをお手伝いしますので、まずは相談してほしいと思います。実際には双方の認識を一致させることが大切なので、事前のコミュニケーションを深める中から、新たなパートナーシップを見出していくようにしたいと思います。福祉ロボットはまだ未開の分野でもあり、MACC 会員企業の中から新たな産学連携を具体化するチャンスを広げたいと思います。



室山丈夫氏

東京都立産業技術高等専門学校 ロボット工学コース教授 源雅彦氏

～ロボットづくりを楽しむ仲間を増やしたい！～

福祉ロボットを活用した技術開発は、少子高齢化社会に不可欠の研究テーマでもあります。私自身、遠隔作業用視覚インターフェースを含むロボット開発に取り組み、国土交通省の災害ロボットの開発に係ってきた経験もあります。ロボットシステムは作れば作るほどノウハウが蓄積され、次のシステムづくりへの可能



源雅彦氏

性を広げるといふ楽しみが出てきます。健康・福祉分野は開発テーマも山積しているので、MACC プロジェクトに参加させていただき、今後、産学連携を積極的に進めて、技術開発に幅広くチャレンジしていきたいと思います。

海外展開セミナーのお知らせ

グローバル化と叫ばれて久しく時が経ちました。モノづくり産業にとって脅威と捉えがちなグローバル化ですが、一方で成長著しい新興諸国の旺盛な需要を取り込むことが出来るチャンスでもあります。

実際に日本の商品をアジアへ販売・展開をしているアジアネット代表の田中豊氏を講師にお招きし、アジアをめぐるビジネスチャンスを自社に取り込んで活路を見出すヒントをつかむためのセミナーを開催します。是非ご参加下さい。

- 【開催日時】7月6日(水) 15:00~17:00 【会場】荒川区産業経済部4階研修室A
 【内容】講演「日本の商品はアジアでヒットする!!」 講師：アジアネット代表 田中豊氏
 パネルディスカッション「アジアチャンス企業にどう取り込むか」
 パネリスト：(株)ストロング 平岩隆宏氏・吉村繊維(株) 吉村功氏
 コーディネーター：MACCシニアコーディネーター 豊泉光男
 【その他】申込み・お問合せは、荒川区産業経済部経営支援課(03-3802-4683)小貫まで
 荒川区HPからも詳細をご覧ください
<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/event/sangyo/kaigaitenkai.html>



【講演 2】「人材採用のコツ<ミスマッチ人材を採らない方法>」

講師：松本星子氏(松本社会保険労務士事務所)

中村嘉弘氏(松本社会保険労務士事務所)

最近の景気指標は、概して底入れから回復への改善傾向を示していますが、雇用情勢は依然厳しい状況にあります。完全雇用率、有効求人倍率とも最悪期に近い冷え切った水準にあり、就職・求職に関しては極めて深刻な状況が続いています。

就職・求職が深刻な分、企業側にとっては、人材採用が「楽」になっていると見られがちですが、「多くの応募者との面接など事務処理に追われ、人選に困った」とか、「採用したが、ミスマッチ人材だった」といった声が多く、人材確保のチャンスにありながら「良い人材が集まらない」と嘆く中小企業者が目立ちます。



松本星子氏

～募集や採用の活動前にすべきこと～

希望する人材が採用できるかどうかは、あくまで企業側の問題なので、自社の採用に関するスタンスを明確にして臨むことが必要です。人材募集や採用を行う前に、どういう人材を採用するか、どういう採用方法があるかなどの準備を整えることが基本です。そのうえで、きちっとした情報を発信することが要件となります。自社のホームページや採用広告にしる、ハローワークを通じて人材を募集するにしる、どのような人材を求めているかを分かりやすく、採用の真意を伝えることが大切です。求人票や求人広告の書き方にも工夫が必要です。重要な情報である「会社の特徴」や「仕事の特徴」については、横並びスタイルになりやすいので、ここでは「会社の発展を共に目指す」といった思いを添えて記述するのがコツです。

～公的な支援策を見落とすな！～

下準備で見落とせないのは、企業の人材確保を支援する国や公的機関の情報を収集することです。例えば、職業訓練を修了した人を採用した企業に助成金を交付する東京都の就職チャレンジ支援事業制度など、公的サービスを活用する方法も考えられます。

ミスマッチ人材を採用したからといって、安易にその人を辞めさせることはできません。もし助成金を受けている人を解雇すれば助成金の支給もストップし、たいへんな負担を背負うことになります。雇用環境が変わっても、募集と採用の活動前に知恵を絞ることが人材確保には欠かせません。

～雇用ミスマッチを防ぐ4つのポイント～

企業側からみて「ミスマッチの人材」とは、利益を生まない 良好な成果が出ない人材です。このミスマッチの人材を採用しないためには、4つのことを準備する必要があります。それは募集や採用の活動前に、採用した人が入社後に取ってほしい行動特性を決める、書類選考から面接して採用するまでの具体的な採用プロセスを決める、業務スキルや就業への適応力などのチェック項目を記した面接評価書をつくる、常に採用プロセスを評価・改善する - ことがポイントになります。



中村嘉弘氏

～「選ばれる」企業になることも要件～

しかしながら、企業側は人材を「選ぶ」だけで済ませてはいけません。人材側から「選ばれる」ように努力することが大切です。選ばれる企業になるよう、求人票やホームページ自体を見直し、企業の顔となる社長や面接官のイメージ、職場環境なども魅力あるものにする必要があります。

茨城県圏央道沿線・千葉県東葛（TX沿線） 地域新産業創出推進ネットワークが発足

～新たな推進体制が発足！～

5月14日（金）に、東葛テクノプラザにて「茨城県圏央道沿線・千葉県東葛（つくばエクスプレス沿線）地域新産業創出推進ネットワーク」総会が開催され、前身の「東葛川口つくば（TX沿線）地域新産業創出推進ネットワーク」に代わって新たなネットワーク推進体制が発足しました。

茨城県圏央道沿線・千葉県東葛(つくばエクスプレス沿線)地域新産業創出推進ネットワークとは？

平成 21 年度まで、国の産業クラスター計画に基づき、広域的な連携による新産業・新事業の創出支援のため、「東葛川口つくば(ＴＸ沿線)地域新産業創出推進ネットワーク」と称して、「大企業との連携事業」、「展示会共同出展」、「研究成果実用化交流会」等の支援事業を推進してきました。平成 22 年度からは、企業立地促進法(企業立地の促進等による地域における産業集積の形成及び活性化に関する法律)に基づきネットワーク事業を展開するべく、推進体制の変更が施されたとともに、ネットワーク名称も変更するに至りました。

今後も荒川区は、ネットワークとの連携による支援を実施します！

荒川区は、平成 18 年度からネットワークの対象地域に指定され、平成 21 年度から拠点地域として本格的にネットワークに参加してきました。推進体制は変更となりましたが、母体となったクラスター計画との広域連携を引き続き推進していくことが、本総会において決定されました。これを受けて、本年度も MACC プロジェクトは、広域的な連携による新産業・新事業の創出支援を推進していきます。

MACC コーディネーター TOMMY の部屋 VOL.12

トミーが語る病気の話(1)

MACC シニアコーディネータ 豊泉 光男

人間の寿命は、元総理大臣の大隈重信説によれば 125 歳であると言われます。しかしながら、人は天災・事故・病気等の為とは言え、その天寿を全うする事は未だ叶いません。しかし一方で、わが国の第二次世界大戦以前(1940 年以前)の平均寿命が 50 歳前後であり、現在のわが国の平均寿命が 80 歳を超える事を考えると、驚くべき長寿に変身したと言えるでしょう。このわが国の長寿を支えている大きな柱は、医療体制の進歩にある事は、言うまでもありません。日本人いや人類が嘗々として、今まで克服し、また今後も克服し続けなければならない長寿への課題は、病との戦いがあります。「長い事人間やっていれば、あちこち悪い所は出てくるよ」と多くのご高齢の方々は口々におっしゃいます。しかし、成人病から生活習慣病へと言葉も変化し、その予防対策も明確になってきました。健康は万人にとって望むところではありますが、特に経営者の健康は、企業の存続にかかわる大きな問題です。

前置きが長くなりましたが、今回は僅かでも皆様にご参考になりますよう、「トミー自身の生活習慣から学ぶ、経営者の健康管理」をお伝えしたいと思います。

いきなりですが、トミーの病気は「急性心臓弁膜症」です。この病気のために 15 年の間に 2 回の胸部切開で僧帽弁手術を行いました。最初の手術は、今から 15 年前の 1996 年(平成 8 年)2 月 26 日、2 回目の手術は本年 2010 年(平成 22 年)1 月 20 日に行われました。本年の手術に際しては、MACC 関係の多くの方々からの励ましをいただき、心強く手術に望む事ができ

ました。この場を借りまして、心より御礼申し上げます。

この病気は、心臓の 5 ミリ程度の僧帽弁の開閉がうまく

出来なくなって、血液が逆流することで、酸素不足となり心臓にダメージを与える病気です。原因は、はっきりとしませんが、風邪の菌が弁膜に付着し筋繊維が切れた可能性が高いとのことでした。では、何故、風邪の菌が弁膜に付着したのか。どうもそれは、経営者時代のトミーの生活習慣に関係がありそうです。不幸にして病気になってしまった方々、それには何らかの原因があると言われます。何気ない日常の行動や習慣の中にその原因が存在しており、良い生活習慣は健康をもたらす、悪い生活習慣は病気をもたらします。まずは最初の手術前後、当時のトミーの生活習慣はどうだったのでしょうか。振り返ってみる事にしましょう。

トミーの反省すべき生活習慣の 1 つ目は、ストレスです。

1992 年(平成 4 年)8 月 24 日朝 4 時、さすがにまだ夜は明けません。トミー(当時 42 歳)は寝ぼけ眼をこすりながら、冷水で顔を洗い、ジュースを飲んで、出発の準備にかかります。目的地は成田空港、6 回目の海外出張へ向かうため自宅から成田まで 2 時間半、一人車を飛ばします。今回の海外出張は 2 週間、訪問



最初の手術直前

地は、香港・シンガポール・マレーシア・タイ・ベトナム・フィリピンとハードスケジュール！用向きも、リサイクルの講演会講師・提携・株主総会・プラント輸出契約の交渉・VIP との面談と多彩であります。ベトナムでの契約交渉は後にも先にも長い海外ビジネスを行っている中でも、これ程までに疲労を感じた事はありませんでした。

8月24日に成田を発ち、香港から深圳に向かい、プラスチックリサイクル工場の視察と今後の契約を行います。すぐさま踵を返して香港へ。香港・広東地区プラスチックリサイクル組織作りの会合に日本人として出席し、その後、シンガポール地区のリサイクル協会準備委員会にも出席。次に、同マレーシア地区のリサイクル協会設立に日本人としてスピーチ、さらにタイへ渡って、バンコクでリサイクル協会設立の啓蒙を行いました。ここで10社以上の同業者の理解を得るには、随分時間がかかりました。一時は万事ご破算と思われましたが、トミーの下手くそな英語のスピーチが効いたのか体制は雪崩を打って替わります。この時ほど、ライフワーク

である「アジアと日本の懸け橋になりたい」と実感できたことはありませんでした。この時の活動は、後にAMEPS



AMEPS(大阪大会)日本代表メンバー

<http://www.ameps.net/> (現在の参加国は日本・韓国・台湾・香港・シンガポール・マレーシア・フィリピン・タイ・オーストラリア・ニュージーランド・インド・インドネシア・ベトナム)として、アジアのプラスチックリサイクル協会の設立という“夢の実現”に大いに貢献できた瞬間でもあったのです。

喜びもつかの間、8月30日、バンコクよりベトナム航空で、昔はよく見かけたシーリングが適当な機内食の包装と格闘しながらハノイに到着。宿泊先のホテルでは赤錆ブレンドの水道水や大型ゴキブリに悩まされましたが、タイ滞在中はスパイシーな食べ物に圧倒されたので、ベトナムでは優しい穏やかな味が嬉しいです。そのため夕食は迷わず、ハノイ名物フォーを食べます。フォーは日本のきしめんに似ていますが、原料は米粉と水であり、ライスヌードルの一種です。本場はハノイとされており、スープはあっさりとしていて

優しい味です。

さて、海外ビジネスでは、多くは英語での会話・交渉・書類・契約書・サインが付き物、慣れない日本人には、最初はものすごく疲れます。加えて、商習慣に関して国民



社長時代のトミー

性が全然違います。サッパリ派の日本人トミーは、粘着質でこってり派の中国系のビジネスマンにはいつもやりこめられる事が多く、最初は0勝10敗で黒星続き。漸くこちらも猛勉強して、5年間経って漸く五分五分に持ち込む事が出来るようになりました。これは、一重に華僑ビジネスマンから直伝のビジネスを学んだ結果の賜です。荒川区の若手経営者にもぜひ伝授したいテクニックの一つですね。さて、いよいよベトナムにプラスチックの小型工場プラントを輸出する契約交渉開始のゴングが鳴りました。ドラフトは、こちらで用意し、英文で15ページ程度の比較的簡素な契約書でした。交渉には日本側は、トミー1人、相手は国立大学教授で、この度新会社の社長に就任したV氏、それと側近2人、さらに通訳1人。朝9時から夜9時まで、3日間ぶっ続けの交渉でした。この時、初めてベトナム人のタフぶりを間近でひしひしと感じました。確かにタフ・ネゴシエーターには敬意を払いますが、トミーの胃袋と腸は、いささか異なる反応をしました。こちらが席を立たんばかりの値引き要求を笑いながらする交渉は、延々と昼食時でも夕食時でも続きます。さらに、時折出てくるアメンボ入り氷も手伝って、お陰でこちらは胃痛、下痢に苛まれ、夜もおちおち寝られず、契約調印の3日目には体重が5kgも減っていました。中小企業では、海外出張は多額の交通費がかかりますので、決定権のある代表者が1人で行く事が多くなります。従って出張中は、何でも全て1で行うという事になります。出張中発生したストレスも1人で解消しなければなりません。これらのストレスが蓄積された結果が病気の原因ではなかったかと思えます。

トミーの場合、ホテルのスポーツジムを活用したり、ホテルの見知らぬパーテナーと会話を楽しむことなるべくストレスを解消していました。友人の国際ビジネスマンは、スーツケースにランニングシューズと水着は必ずいれておくようにと私に勧めてくれました。まあ、このストレス解消対策だけでは、十分とは言えませんが、まずはお試しあれ！

続いてのトミーの生活習慣、2 つ目の反省点は温度調整と睡眠不足ですね。

1995年(平成7年)3月25日、朝7時の成田空港はまだ閑散としています。トミー(当時45歳)はJAL741便、マニラ行きに1人乗り込みました。今回はフィリピン・シンガポール・インドネシアの3ヶ国を1週間駆り巡ります。『貧乏暇なし』と、よく言ったもの。この時、出発地成田の天候は晴れ、気温5、真冬並みの気候に防寒用のコートは欠かせません。一方、到着地マニラのニーノアキノ空港のお天気は晴れ、温度計は30を超えています。実に気温差25。灼熱の太陽とムツとする暑さで長袖の下着を着たままのトミーには、まるで蒸し風呂状態で頭がクラクラします。3時間余りのフライトでこの温度差、これが恒例とは言え、40歳を超えた身体には、回数を重ねる度に飛行機の金属疲労のように体内に容赦なく溜まっています。気候でいえば、インドネシア・タイはもっと熱く、マレーシア・台湾は穏やかな暑さです。加えていずれの国でも、サービス過剰な冷房(部屋のエアコンは例外なく16の強に設定されている)の大歓迎で、注意しないと夏風邪を引いてしまいます。この温度差管理を克服しなければASEANビジネスは、成功しないと言ってもよいでしょう。

3月28日には、シンガポールからインドネシアの首都ジャカルタへ。今回はインドネシア進出のためのプレ調査であり、マーケット・パートナー・競合・顧客等の可能性をトップとして判断する重要な訪問となっています。全ての訪問を終えて3月31日には広いジャカルタ空港で、1人ポツンと疲れた姿で帰国のフライトを待つトミーの姿がありました。ジャカルタ空港をJAL726便が発つ時の時計の針は23時30分、深夜と言ってよいでしょう。あと30分もすれば、シンデレラの馬車もカボチャに替わってしまいます。夜更かしにめっぽう弱いトミーにとって、このフライトは結構試練でした。ジャンボ機に乗り込むとすぐに食事が運ばれます。アルコールの勢いを借りて無理やり押し込み、後は成田着朝8時20分までひたすら爆睡するのみ、とお決まりのコースと決め込みたいところですが、窮屈な機内席での熟睡は困難を極めます。成田到着後、しばらく休息した後は、また1人車を運転して、休日の高速道路を一気に自宅まで急ぎます。気温差と睡眠不足は、健康体にとってかなりのダメージ。この要素も病気には大きく影響したことと思います。



マレーシアの合弁会社(JEPSRAを迎えて)



インドネシア現地法人の社員達とスマイルショット

さてこの辺で、生活習慣の反省の続きは、次号に譲ることにしたいと思います。今回は、海外ビジネスのお話が多くなりました。トミーにとって、それは、19歳の時に抱いた夢であり、また心臓弁膜症を発症する原因の一つでもあった訳です。

最後にお知らせがあります。この度、MACCで海外ビジネスのセミナーを開催する事になりました。特に、成長アジアをライバルではなく、自社の成長にどう取り込むかがテーマです。講師には、ガイアの夜明けで有名な田中氏の講演と荒川の海外ビジネス先輩企業とのパネルディスカッション、勿論、トミーもファシリテーターで参加させていただきます。この機会に皆様のご参加を心よりお待ちしております。(詳細は、3ページをご覧ください。)

< 発行 >

荒川区産業経済部経営支援課
MACCプロジェクト事務局
〒116-0002
東京都荒川区荒川2-1-5 セントラル荒川ビル3階
TEL:03-3803-2311 FAX:03-3803-2333
E-mail:macc@city.arakawa.tokyo.jp
URL:http://sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/